

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520433

研究課題名(和文) 焦点化構文の意味機能に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Semantic Functions of Focus Marking Constructions

研究代表者

熊本 千明 (Kumamoto, Chiaki)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：10153355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：焦点化構文の中、主として日・英語の分裂文、指定文、倒置構文の意味機能、語用論的機能を検討した。「焦点」の概念の明確化には、情報構造に加えて、様々な名詞句の意味機能の考察が必要である(cf. 西山2003)。特に以下の点を明らかにした。(1) 指定の本質的な機能は変項の値の付与であり、指定や同一性認定の機能とは異なる。(2) 指定文の焦点は、値として選択されたものとそれ以外のものとの対比、倒置構文の焦点は、文の要素の談話における相対的熟知度により規定される。(3) it 分裂文とthat 分裂文は意味機能が異なり、前者が値を付与するのに対し、後者はすでに付与された値の同一性を確認する。

研究成果の概要(英文)：Within the field of focus marking constructions, I have paid special attention to cleft sentences, specificational sentences and inversion in English and Japanese, and investigated their semantic and pragmatic functions. Not only information structure but also semantic functions of different types of NPs (cf. Nishiyama 2003) need to be accounted for to clarify the concept of focus. Specifically, I have shown: (1) the essential function of specification is the assignment of a value to a variable, which cannot be reduced to the function of predication or of equation; (2) the focus of specificational sentences is defined in terms of the contrast between the selected and non-selected values while that of inversion is defined in terms of the relative discourse familiarity of the elements in the sentence; (3) the it-cleft and the that-cleft perform different semantic functions; the former assigns a value while the latter confirms the identity of the value which has already been assigned.

研究分野：言語学

キーワード：焦点 情報構造 分裂文 倒置構文 指定文 措定文 変項名詞句 代名詞

1. 研究開始当初の背景

構文によって焦点要素を示す「焦点化構文」については、さまざまな観点から研究が行われてきた。これらの構文が示すといわれる「際立ち」「強調」「新情報」「値」等の概念は、しかしながら、必ずしも明確ではなく、これらの概念を整理しないままに、意味機能や情報構造に関する議論が、混在して行われている。特に、分裂文、指定文が示す指定機能と、倒置構文が示す提示機能は大きく異なるものであるが、しばしば取り上げられる構文であるにもかかわらず、両者の本質を捉えた議論はなされてこなかった。以下に見るように、両者の区別はしばしば曖昧なままに残され、むしろ、類似性に注目した議論が広く行われてきた。あるいは、両者の違いに注目する場合でも、相違点の説明に用いられる概念の規定が不明瞭であった。

- (1) 英語においては、*it* 分裂文、WH 分裂文は、焦点をマークする構文として、倒置構文と並んで論じられることがある。例えば、Rochemont (1978) は「際立ち」の効果という点における倒置構文と *it* 分裂文の類似性を論じている。後に、Rochemont (1986) は、対比的焦点と提示的焦点の区別を提案するが、ある要素が目下の話題になっているかどうか、という談話上の観点からの規定は、十分なものとはいえない。Dorgeloh (1997) は、倒置構文には、指定文として解釈されるものがあると述べている。さらに、Birner and Ward (1998) は、倒置構文が適切であるためには変項を含む open proposition が想定されなければならない、と論じることによって、変項の値を指定する機能をもつ分裂文との関連を間接的に示している。これらの議論には、指定と提示の機能の混同、焦点の概念の不明瞭さが問題として残されている。
- (2) 日本語に関しては、ガ分裂文「AノガBダ」と八分裂文「AノハBダ」の意味機能の相違が問題となってきた。天野 (1995) は、ガ分裂文の説明に後項焦点文という用語を導入するが、八分裂文と区別せずに、いずれも指定文であると主張する。砂川 (2005) は、このタイプのガ分裂文は全体焦点文であると、焦点提示機能とは異なる、特立提示機能をもつものと考え、Kuroda (2005) は、八分裂文の A は旧情報を表し B は焦点として強調されているのに対し、ガ分裂文の A は新情報を表し B は主題として強調されていると述べるが、それぞれの分裂文の意味機能については言及していない。こうした研究に共通するのは、「焦点」「強調」の概念が明確に規定されていないことである。

熊本 (2009) では、ガ分裂文を談話に新たに要素を導入する提示機能の観点から検討し、文中の他の要素との関連における際立ちを

示すという特徴に注目した。英語の分裂文は、通常、日本語の八分裂文を用いて訳されることが多いが、倒置構文はガ分裂文を用いて訳されることがよくある。対応する日英の構文を比較検討することによって、提示機能、指定機能の相違、焦点化構文の特性を一層明確に示すことが可能になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、日・英語の焦点化構文の中から、特に分裂文、指定文、倒置構文を取り上げ、それぞれの構文の意味機能の類似点、相違点を探ることによって、「焦点」の概念の概念を精緻化する試みである。提示機能、指定機能の本質を探り、意味機能、情報構造、統語的制約等の観点から、焦点化構文の特徴の解明を行うことを意図するものである。具体的には、英語の *it* 分裂文、WH 分裂文、指定文、倒置構文を日本語のガ分裂文、八分裂文と比較し、文の意味構造、焦点を構成する要素の特性、焦点の解釈、等を検討する。日本語の八分裂文と英語の分裂文の比較、日本語と英語の倒置構文の比較はこれまでにもなされてきたが、本研究では提示機能をもつ日本語のガ分裂文と英語の倒置構文を並べて考えることにより、八分裂文、*it* 分裂文、WH 分裂文のもつ指定の機能との違いが一層明確になると期待される。指定文、分裂文の意味構造は、西山 (2003) の提唱する変項名詞句の概念によって明らかにされてきたが、まだ不明な点も残されており、変項名詞句の特性をさらに考察する必要があると考えられる。主として、以下の項目について、検討を行う。

- (1) 分裂文と提示文における焦点の概念はいかに規定されるべきか。「際立ち」「強調」「前景」「新情報」「断定」「値」等の概念はどのように整理することが可能か。
- (2) 指定の機能と提示の機能の本質的な違いは何か。それぞれの機能を探求する際、「変項」の概念はどのように関わってくるか。
- (3) *it* 分裂文、WH 分裂文、倒置構文に関して提案された、変項を含む ‘open proposition’ (Prince 1986, Birner and Ward 1998) の概念と、西山 (1988, 2003) が提唱する「変項名詞句」の概念はどのように異なるか。また、各々、どのような説明力を有するか。
- (4) *it* 分裂文と WH 分裂文、倒置構文の類似点と相違点は、どのような観点から説明することができるか。意味機能と情報構造は、どのような形で構文の選択に寄与するのであろうか。
- (5) 不定名詞句が主語の位置に現れた ‘One example of someone who... is...’ のような例は指定文が倒置された DP inversion の例と考えるべきか、それとも定名詞句を主語とする倒置指定文と同じタイプの指定コピュラ文であると考えられるべきか。

- (6) 八分裂文と *it* 分裂文、WH 分裂文の焦点の位置に現れる要素はどのような特徴をもつか。複数の要素が入ることが可能であるか。焦点要素が唯一的でないことを示す *also* 等を付け加えることが可能であるか。
- (7) 日・英語を比較すると、翻訳の際にガ分裂文と倒置構文、八分裂文と *it* 分裂文、WH 分裂文が対応している例が多く見受けられるが、これらは一対一の対応関係にあるのであろうか。

3. 研究の方法

研究代表者は、これまで長年にわたり、指示性、非指示性という観点から文中における名詞句の特性を考察し、それをもとにしてコンピュータの意味論的、語用論的研究を行ってきた。コンピュータの A、B の位置に現れる要素の特性を細かく検討した上で、コンピュータの多様な用法の整理・分類を継続中であり、その中には、日・英語の分裂文、倒置構文も含まれる。こうした考察において有益であった、西山(2003) の提案する「変項名詞句」の概念を、引き続き援用する。これまでの研究成果を見直し、今後の分析のために必要な諸概念の整理を行う。種々のアプローチにおける「焦点」の概念を比較してその問題点を探り、概念の特徴づけを明確にする。指定機能、提示機能の特徴を調べるため、日・英語の指定文、分裂文、倒置構文にとどまらず、広くコンピュータをも対象とし、さまざまなソースから資料を収集してデータベースを充実させる。同時にインフォーマントも活用する。それぞれの言語の中で分裂文と倒置構文を比較した後、日・英語の対照を行い、従来の研究では十分解明されなかった質的な違いを探る。また、国内外の研究者と議論を行い、未解決の問題の解明を試みる。国内外の学会で研究発表を行って研究成果を公表すると共に、参加者との議論をもとに研究の進展を目指す。

4. 研究成果

本研究においては、指定文の意味構造、倒置構文と分裂文の意味機能の相違、コンピュータに現れる名詞句の特性、名詞句の指示性と代名詞化を中心に考察を行った。研究成果は以下のとおりである。

- (1) 分裂文における代名詞 *it/that* の指示性に関する Hedberg (2000)、Birner, Kaplan and Ward (2007)、Mikkelsen (2005) の議論が不十分であることを指摘し、分裂文における *it/that* の用法を解明するためには、西山(2003)の「変項名詞句」の概念を援用する必要があることを示した。Hedberg は、Gundel et al.(1993) が提案する談話内の情報の givenness の階層性に基づき、分裂文の主語代名詞 *it/that* の類似点、相違点を論じるが、「指示性」の特徴づけが明確ではない。Birner, Kaplan and Ward は、

単純な形の equatives、TWBX 構文(*that would be X*)との比較において *that* 分裂文を論じ、いずれも、文脈において際立つ OP (open proposition)がある場合、*that* は「変項の例示」を指示(refer)すると主張するが、この「変項の例示」の概念が明確に規定されていない。また、*it* 分裂文との比較検討も不十分である。Mikkelsen は、*it/that* 分裂文の主語代名詞は、predicational な性質をもち、非指示的であると主張するが、これでは倒置指定文の主語名詞句と指定文の述語名詞句の性質の違いを捉えることができない。本研究では、*it* 分裂文と異なり、いわゆる「入れ代りの読み」が不可能であること、*also* を用いて焦点の要素を付け加えることができないことなどから、*that* 分裂文は変項を埋める値を指定するのではなく、既に指定された値の同一性を確認するものであることを示した。

- (2) Donnellan (1966) のいう帰属的用法の定名詞句は、指示的名詞句であるにもかかわらず、非指示的名詞句である変項名詞句(西山 2013)としばしば混同されてきた。また、定名詞句が帰属的に用いられていることを示す *whoever* 節は、それ自身が、当該の名詞句が帰属的用法の確定記述であることを保証するかのような、誤った印象を与えてきた。本稿は、*whoever* 節の中に現れる *it* と *she* の対立に注目し、その選択には、主節の定名詞句が文中で果たす意味機能が深く関わっていることを指摘した。帰属的用法の名詞句は、指定の結果である「値」の概念と結びついている。値の選び出しという指定の段階に関与しないことを述べる場合には *it* が用いられ、すでに選び出された値の同定に関与しないことを述べる場合には、*she* が用いられることを、豊富な用例を用いて示した。
- (3) 焦点化構文の一つである指定文の意味特徴を、指定文、同一性文との比較において、詳細に検討した。指定文の本質をとらえるには、西山(2003)の「変項名詞句」の概念が不可欠であるが、この概念を理解せず、指示性に関する考察が不十分な議論においては、コンピュータの前後に現れる名詞句の特徴づけに問題が生じる。指定文を指定文と関係づける Mikkelsen (2005) は、倒置指定文の主語名詞句を叙述名詞句と考えるが、それでは、なぜ、指定文の中に倒置が可能なものとそうでないものがあるのかを説明しなければならない。同様に指定文と指定文を統一的に説明しようとする Patten (2012)は、コンピュータの後の名詞句の定性の違いに注目するが、この二つの文タイプの区別について、定性だけでは正しい予測をすることができない。他方、指定文を同一性文の一種とみなす Heycock and Kroch(1999)

は、指定文のコピュラの前後の名詞句は同種のものであるとするが、いわゆる「真の同一性文」と異なり、指定文においては、二つの名詞句の間に非対称性がある理由を明確に示していない。いずれの場合も、最終的には Discourse-new、Discourse-old、topic-focus といった情報構造上の概念を導入して説明を試みるものの、肝心の名詞句の特性についての考察が不十分である。本研究では、それ自体に変項を含む非指示的名詞句という概念を取り入れなければ、指定文の意味構造は解明できないこと、「焦点」と「値」は異なる概念であり、異なる文タイプの意味構造を把握する上で、両者を注意深く区別する必要があることを示した。

- (4) 人間を先行詞としながら、非制限的用法の関係節内に *who* ではなく *which* が現れるケースを検討し、Declercq (1991)、Huddleston and Pullum (2002)の説明が不十分であることを指摘した。主として、措定文、指定文、存在文を取り上げ、単に、指示的、非指示的という区別ではなく、叙述名詞句、変項名詞句、特定の解釈/非特定の解釈(Ioup 1977) の名詞句、attributive / referential (Donnellan 1966) 用法の名詞句、など、名詞句の特性の様々な側面を統合的に理解することが重要であることを論証した。また、先行詞となる名詞句の意味機能と関係代名詞の意味機能に不一致がある場合には、関係代名詞の意味機能が *who/which* の選択を決定することを明らかにした。
- (5) 倒置指定文を措定文の倒置形であると考え、両者を集合とメンバーの関係によって捉える Patten (2012) の議論の問題点を指摘した。措定と指定の区別には、文中における名詞句の意味機能の理解が重要であることを示した。次に、不定名詞句が主語の位置に現れた措定文の倒置形と、不定名詞句を主語とする倒置指定文の相違を明らかにした。英語には、明示的な標識がないため、指定と措定のどちらの解釈が意図されているのか不明である場合も多いが、措定文に現れる叙述名詞句と(倒置)指定文に現れる変項名詞句(西山 2003、2013)の相違を理解することにより、これらの文の意味機能の区別が可能であることを示した。また、この二つの構文の比較を通して、様々な焦点化構文、倒置構文の情報構造を説明するため用いられてきた「焦点」「際立ち」の概念が一樣ではないことを明らかにした。日本語の八分裂文、ガ分裂文の比較から得られた知見をもとに、英語の倒置構文は提示文とみなすことができること、(倒置)指定文の焦点は、問いに対する答えとして選ばれたという点で、他の答えとの関係において注目されるものであるのに対し、倒置構文の焦点は、ある想定のも

とに新たな要素が導入されるという点で、文中の他の情報との関係において際立ちをもつものであることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

熊本 千明 “Referentiality in Noun Phrases and Relative pronouns,” *Discourse and Interaction*, 査読有, Vol. 8, No. 2, 2015, 掲載決定, Department of English Language and Literature, Masaryk University.

熊本 千明 「不定名詞句を主語とする倒置指定文について」『佐賀大学全学教育機構紀要』査読無, 第3号, 2015, pp. 15-29.

熊本 千明 「指定文・措定文・同一性文」『佐賀大学全学教育機構紀要』査読無, 第2号, 2014, pp. 1-13.

熊本 千明 “Referentiality of the Pronouns *It* and *That* in Copular Sentences”. *Discourse and Interaction*, 査読有, Vol. 5, No. 2, 2012, pp.35-50, Department of English Language and Literature, Masaryk University.

〔学会発表〕(計3件)

熊本 千明 「Patten, Amanda L. (2012) *The English It-Cleft: A Constructional Account and a Diachronic Investigation*, Berlin: De Gruyter Mouton の論考について」第59回慶應意味論・語用論研究会, 2014年11月1日, 慶應義塾大学, 東京都港区.

熊本 千明 “Referentiality in Noun Phrases and Relative pronouns,” 6th Brno Conference on Linguistic Studies in English, 2014年9月12日, マサリク大学, ブルノ, チェコ共和国.

熊本 千明 “Referentiality of the Pronouns *It* and *That* in Copular Sentences,” 5th Brno Conference on Linguistic Studies in English, 2012年9月18日, マサリク大学, ブルノ, チェコ共和国.

〔図書〕(計1件)

熊本 千明, 西山 佑司, 小屋 逸樹, 梶浦 恭平, 峯島 宏次, 西川 賢哉, 山泉 実, ひつじ書房, 『名詞句の世界』2013年12月, 第12章「帰属的用法と *Whoever* 節の機能」pp. 341-368.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊本 千明 (KUMAMOTO, Chiaki)

佐賀大学文化教育学部・教授

研究者番号：10153355

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：